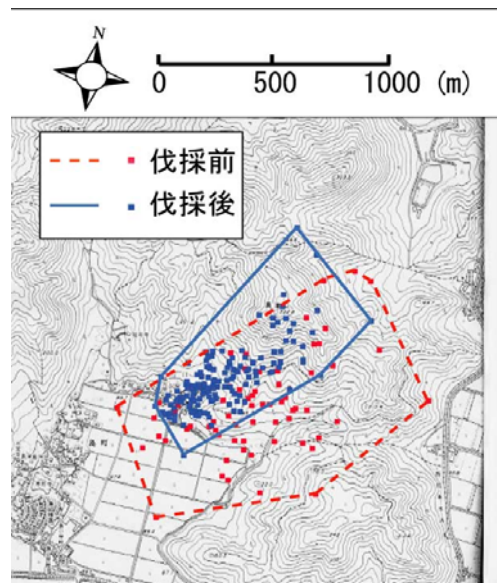


林地の有効利用でイノシシ防除

1. 農地に接する山すその林を伐採

被害発生農地に隣接する未利用林地を伐採したところ、イノシシは伐採地を避けるよう行動圏を変え、被害も減少した。ただし伐採地を放置したことによるタケの再生のためにイノシシの利用が一時的に増えたが、タケを伐採することにより、再び減少した。伐採後の管理が大切である。



伐採前、伐採後の行動圏

2. 伐採地で山菜の栽培

伐採地の利用方法として、イノシシが食べない山菜（サワアザミとハタケワサビ）を栽培したところ、イノシシの伐採地への侵入が全くみられなくなった。藪化の防止、山菜の管理や収穫作業のための人の出入りがイノシシへの圧力になっていると考えられた。



ハタケワサビの栽培による伐採地管理

3. 放牧による伐採地の管理

日当たりがよく、草が多く生える伐採地で、ヒツジ 2-3 頭／0.3-0.5ha の放牧を行った。放牧後、しばらくはイノシシの侵入が非常に少なかったが、秋になると増加した。放牧により約3ヶ月で林床の植物は食べつくされた。



放牧したヒツジ。ほぼ植物を食べつくした。

被害対策のポイント

1. 農地に隣接する未利用林地を伐採し、見通しをよくすることで、イノシシの農地への進入を減少させることができる。ただし効果を持続させるためには抑草管理が必要であり、省力化には次に述べるような管理が有効で副産物も得られる。
2. 伐採後にサワアザミやハタケワサビといった山菜の栽培を行うことにより、伐採地が維持されるとともに、山菜の管理や収穫作業がイノシシへの圧力になる。
3. ヒツジの放牧により伐採地の藪化を抑えることができ、イノシシの進入を抑制できる。

<課題名> 林地（雑木林含）の有効利用による獣害抑制技術の開発

<目的> 獣害発生農耕地に隣接する、放置されて暗い二次林、未間伐植林、あるいは藪となっている林地を伐採・活用し、農耕地と獣の生息場所の緩衝地帯としての機能を回復させることによる獣害抑制技術を開発する。

<成果の問い合わせ先>

野間 直彦（のま なおひこ）

滋賀県立大学 環境科学部

滋賀県彦根市八坂町 2500

電話 : 0749-28-8303

メール : noma@ses.usp.ac.jp